

扇の松の木の下で

~花水をもっと「わたしたちのまち」に~



第3号

2002年11月3日
編集:花水福祉
コミュニティづくり
グループ
「チーム土と風」

花水の人々を紹介するこのコーナーの第1回目は、私たち「福祉コミュニティづくりグループ」のメンバー2人に、花水のこと、活動のことについて対談をしてもらいました。

荻野: 小川さんとは昨年の8月にはじめてお会いしたのですが、若い方のフレッシュな考えがコミュニティの新たな動きになるのではないかと思いました。

小川: 荻野さんは、地区社協の会長で町内福祉村の会長でもあるわけですが、そういう役がなくても参加されましたか?

荻野: 自分の課題として、若い力が地域の中では必要であると思っていたので、みんなで出来ることがあれば、参加したいと思っていました。

フィリピンに負けている日本

小川: 私の場合、小さい頃から、貧しい国の子どもたちの助けになりたいといろいろボランティアをやっていたんですが、大学に入ってフィリピンに行って孤児院を手伝う機会があったんです。ホームステイした家で、どの子がその家の子かわからないぐらい、お隣同士が互いに面倒を見合って、「一緒に暮らしている」という感じで、私は、それがすごく楽しかった。日本は負けているなと思ったんです。私のしたい暮らしはそういう暮らしで、この活動のチラシをみたとき、自分たちの暮らしをもっと自分たちが気持ちよいように作っていこうという考え方がすばらしいと思いました

した。「みんなでまちを作っていくんだ」、どんなことが出来るのかなと思い参加しました。

荻野: フィリピンのような近所の人との付き合いが、昔はあった。それが、いつのまにか崩れてしまったわけだけど、お互いに助け合うことは花水でも出来るだろうと思ってきている。「福祉コミュニティづくりグループ」のよさは、いろいろな年代の人たちが集まっていることであると思います。新しい時代の中にあって、自分の目標を持ちながら活動している姿はいいなと思います。

「助けあい」はそんなに難しいことではない

小川: 荻野さんにお会いして、地域にずっと住んでいて、ずっといろいろな活動をしていらっしゃる人たちが見守ってくれているのだなと思いました。「助けあい」というのは、何か大きなことをしなくてはならないとずっと思ってきたのですが、この活動を通して「助けあい」はそんなに難しいことではないことを学びました。地域の人たちと付き合うリズムや人との関係のとり方などを荻野さんから学んだと思っています。

荻野: 湘南FMナパサに出演した宮坂さん(*) があっしゃった「住んでいてよかつたまち、住みたいまちにしていきたい」という気持ちが大切だと思います。多くの人がそうであると思っていても、なかなか先立って動く人は多くない。でも、自分が主になって動きだすということが出来れば、地域が変わっていくのだと思います。

小川: それは面倒くさいというか、手間がかかりますよね。それを始めようとしたのが、この活動だと思いますが、この1年間のやられたご感想はいかがでしょうか?

(*)1月と8月に各チームが6回にわたり出演した





荻野俊夫さん(福祉村を考える会、福祉マップ作りチーム)

1929年(昭和4年)小田原生まれ。昭和31年から花水へ。小学校の先生として40年間勤めた。地域の歴史についても造詣が深い。インタビューの中から出てきた「町内福祉村」の会長でもある。なぎさふれあいセンターにある町内福祉村では、月・金曜日 午後1時~4時、コーディネーターが、困ったことは何でも相談を受け付けている(電話21-3401)

荻野:時間をかけなくてはならないと思います。多くの人々ともっと話をしていくかなくてはならないと思っています。私たちがやっていることが、1つ1つ地域の人たちに注目され始め、それが何かにつながっていくと思うのです。小中学校の子どもたちに福祉のことを知ってもらう機会にしたりすることも大切であると思います。

小川:この1年を通して、私たちの中で学んだり、私たちの中で広がったことも大きいですが、他の人たちが何かを行うきっかけや引き金になって広がっていったら面白いことですね。

荻野:他の地域の人が花水のことについてくれているのをあちこちで聞きますが、よい地域にするためにどのような取組みをしていたらよいのかわからないというところだと思います。私たち自身も学びながら、模索しながら、ということだと思います。

花水に住んで46年ですけれど、地域の変貌などを見てきました。中にいると、その変化はわからないのですが、どうですか花水は。

花水のよいところは地域活動に積極的なこと

小川:ここにはじめて来た時には、きれいな所だなという印象がありました。昔ながらの商店街なども残っていて、きれいだけでなく、昔から住んでいる人たちの暮らしもあるのだなあと感じました。長く花水に住んでいる荻野さんに、昔から変わらない花水のよいところをお聞きしたいのですが。

荻野:よその地域の人から聞いても、花水は落ち着いていてよいところであるとよく聞きます。人物でゆかりのある人も村井弦斎さんとか中勘介さんとかいらっしゃいますが、明治には別荘地だったわけです。すばらしいまちを作る素質があったのではないかと思います。マンションに引越してきた方が、すばらしい風景などに対して、引越してよかったと言っていました。こころの故郷としてもすばらしい花水にならなくてはと思っています。

小川:1つのものごとを見る場合に、年代によって、そのよさを感じる視点が違うのだということが分かりました。違う視点を持っていることを知りえたことが本当によかったです。収穫だったと思います。

荻野:花水の人たちのよい部分は、多くの人たちが地域の活動に積極的に参加してくれることだと思います。地域の人たちに、地域の各団体がやっていることに目を向けてもらいたいとお願いしたい。自分たちのまちをよくするために、みんながそういった活動に参加しなくてはならないということを知ってもらいたいですね。自治会の人たちが、その名の通り、自分たちなりの問題意識を持って、問題を発見したならばお互いにその問題を追及していくこと、そのことがまちをよくすることにつながると思います。隣の人と協調する、助け合うことが当たり前に出来るようになるとよいですね。

「土と風」に期待すること

高橋龍正(編集部):この情報誌は、「チーム土と風」が担当して、装い新たに発刊することになりました。地域を支えているのは、ほとんどが全日制の市民で、地域に根ざしているという意味では「土の人」。地域に関心はあるが、通勤や通学などで昼間は地域にいない人は「風の人」。この「土の人」、「風の人」の両方の交流の場として情報を発信していくこう思います。この情報誌に期待することは何でしょうか。

小川:地域にどんな人がいるのか、どんなことをやっているのかを知ることが、楽しいこと

に気付いてほしいなあと思います。人付き合いは面倒くさい、と先ほど言いました。これは私たち若い人特有な考えだと思いますが、きっかけさえあれば、付き合っていくことで自分の中でプラスになっていくことがあると思います。私はこの活動に参加して、荻野さんや皆さんとの顔を知れたり、お人柄も知れたり、その先で自治会活動などにも関心を持つことも出来ました。人につながっていくける、それが楽しいことであるということを知るきっかけになればと思います。

荻野：土と風の情報誌はすばらしいテーマだと思います。農家のひとたちは土（土壤）のことを真剣に考えているんですよ。人間を育てる本当のおおもとであると思う。でも土なくして人間は語れないけど、土を変化させるものは風だと思います。松の梢を吹いていく風のすばらしさ。明治29年の写真で見る「扇の松」は、すばらしい枝振りでしたよ。変化はそこに暮らしているとなかなか気付かないものですが、大きなスパンで見るとその変化が分かります。

小川：松が変化をあらわしているように、「土と風」では変化しているものも変わらないものも両方伝えていくことが出来ればと思います。

荻野：読者の皆さんのがその中でどうあるべきかということを自問自答していくような情報誌になればよいですね。それらが喜ばれるものになればと思っています。それと同時にコミュニティづくりも活発になればと思います。

小川：私たちも、もっと精進しなければいけないですね（笑）。



小川久美子さん(サロンチーム、チーム土と風)
1980年（昭和55年）福岡県生まれ
慶應義塾大学総合政策学部4年

於:花水公民館 記録:中島民恵子(イラスト
も)

次回から、地域のさまざまな人や活動を取り上げていきます。お楽しみに。この人を取り上げて、という情報もお待ちしています。

福祉コミュニティづくりグループでは、チーム活動の様子を、ホームページでも、詳しくお知らせしています。

<http://y7.net/hanamizu/>
ボランティアスタッフも募集中！詳しく述べ下記まで。
e-mail:hanacrosslove@anet.ne.jp



今、花水が熱い！熱いといつても、もちろん火事があって燃えているわけではない。「花水福祉コミュニティづくり」が、全国から熱い視線を浴びているのだ。果たして、このことを知っている花水地区の住人は、どれだけいるであろうか？

私は仕事柄、マスコミ関係者や大学教授に会う機会が多い。だいたい東京でそれらの人に会うのだが、驚くことに多くの人が花水の活動を知っている。そして高い評価をしているのだ。メンバーである私としては、鼻高々である。

それでは、なぜ花水福祉コミュニティの活動が注目されているか。一つは、若者、主婦、サラリーマンなど、いわゆる普通の人が参加していることだ。「福祉」や「まちづくり」を看板に掲げているが、ごく一部の関係者だけの集まりでない。この一見当たり前のことが、今の世の中では難しい。もう一つは、みんな楽しく活動をしていることだ。説教臭くないところもいい。

楽しみながら、いい地域づくり。こんな花水福祉コミュニティづくりを、より多くの人と一緒に盛り上げていきたい。ビバ花水！

檜山 大：シンクタンク研究員&空手道場清風館指導員

ビデオ上映会のお知らせ

私たちのチームはこの度、秋田県鷹巣町(たかのす)の町おこしの様子を描いたビデオ上映会を企画しました。人口約23,000人の鷹巣町では10年前、「福祉の町づくり」を掲げた町長が、徹底した住民参加により町民の提言を積極的に行政に取り上げていきました。上映するビデオは、この過程を追ったドキュメンタリーであり、1999年のキネマ旬報文化映画作品賞に輝いた作品です。

花水地区に住む私達一人ひとりにとって、これからも福祉を考え、まちづくりに参加するきっかけとなればと考えています。お誘いあわせてお出かけください。

(ビデオ上映チーム:鈴木憲子 tel 31-9619)

日時 平成14年11月30日(土)14:00~16:30

場所 花水公民館 2階ホール

内容(作品名) 続「住民が選択した町の福祉」

参加費 無料

花水福祉コミュニティづくりとは

市役所の呼びかけで一般公募で集まった30名が昨年8月から活動を開始したものです。今年は6チームに分かれて活動を進めており、この情報誌を編集している「チーム土と風」はそのうちの1つです。今号で紹介できなかったチームとして、他に「福祉マップ作りチーム」「ボランティア育成チーム」があります。

私たちの活動に興味をもたれた方は、各チームの連絡先へお気軽にお知らせください。この誌面へのご意見や、ご投稿もお待ちしています。

また、この情報誌を置いていただいた各位に御礼申し上げます。(HM)

<編集後記>

福祉コミュニティづくりの活動が2年目に入り、住民による地域の助け合いの方法が段々形となって見えてきた気がします。現在6チームがそれぞれ活動計画を持ち自由に独自の運動をしています。もっとも目的はひとつ「花水を住みよいまちに」ですから全員の英知の結集と協調を図るため、月1回程度各チームの代表が集まり報告や相談をしています。ちなみにこの情報誌の配布方法についても意見が出て、皆さんのが良く立ち寄る場所にも置いていただきました。お気づきの点があればご一報ください。(T)

今、中学生は公民の時間に「共に生きること」の大切さを学んでいるそうです。人は一人の力で生き抜くことは出来ません。長い人生の中のどこかで、必ず誰かに助けられているはずです。これからは、「助けている人」も「助けられている人」も同じ目線で、共に生きていくことができるといいのかもしれないを感じています。(Rinda)

チーム活動報告

わっか 話花(WAKKA)サロンチーム

「私たちの暮らす街を、私たちの手で、楽しく暮らしやすく」というコンセプトのもとにお茶を飲みながら、自由に意見交換をする場所です。地域活動をされている方だけでなく、主婦の方や、学生の方…、色々な方が立場を越えて気軽に談笑しています。色々な方がいるから話題も広がり新しいアイデアも生まれます。自分の考えを聞いて欲しい人、地域のことを探りたい人、誰でも気軽に参加できます。あなたも、お茶を飲みに来ませんか?今後の日程は次のとおりです。

11/16(土)14:00-16:00

11/26(火)14:00-16:00

12/21(土)15:00-17:00

いずれも花水公民館 2F会議室

(佐々木節子 tel 34-3482)

福祉村を考える会

花水地区にある「町内福祉村」を住民の方に広め、大いに利用してもらうには…と、考え始めました。今のところ、

広報活動をもっとしてみたらどうか
無償より多少有償の方が利用しやすいのでは

援助内容についても考える

受付の常駐化はできないか

という課題を出し、ひとつずつ話し合い学んでいるところです。その中で の有償ボランティアや地域通貨のことを勉強し始めているところです。何か、よいヒントがあったら教えてください。

(宮坂由美子 tel 20-1737)

<編集・発行>

花水福祉コミュニティづくり

グループ「チーム土と風」

グループホームページ

<http://y7.net/hanamizu/>
e-mail

hanacrosslove@anet.ne.jp

〒254-0821 平塚市黒部丘2

-10 シティハイム花水 104

tel:0463-32-6870(編集担当:平田実あて)

